



しゅんこうでん

春興殿は、京都御所で行われた大正天皇の即位礼に合わせて大正4年(1915)に造営されました。式の際、皇位とともに継承される三種の神器の一つ「御鏡」を皇居からお移して奉安し、賢所大前の儀を行った建物です。



昭和即位礼時の春興殿前(昭和大礼要録より)

江戸時代からこの紫宸殿東方の場所には春興殿があり、御鏡を奉安する内侍所とされていました。安政度内裏の春興殿は明治時代に取り払われ、その後現在の総檜造、銅板葺、入母屋造の建物が建てられたもので、以後100年弱、大きな手を加えることなく、現在に至っています。

春興殿の前は広く開けた敷地となっており、大正・昭和の即位礼の際にはここに神楽舎や幄舎などが臨時に建てられました。現在、春秋の京都御所一般公開時にはここで雅楽や蹴鞠の催しを行っています。



春興殿前建物解体風景【昭和4年9月】
(京都事務所保存のガラス乾板より)



しゅんこうでん

春興殿の儀式と建物



春興殿は、大正天皇の即位の礼に際し、神鏡を奉安して儀式を行うために建てられた御殿です。昭和天皇の即位の礼で使用された後、老朽化が進んでいましたが、平成 29 年から 31 年にかけて修復が行われ、造営当時の外観を取り戻しました。ここでは、春興殿の使われ方とともに、修復工事に触れながら建物の特徴についてご紹介します。



春興殿における儀式



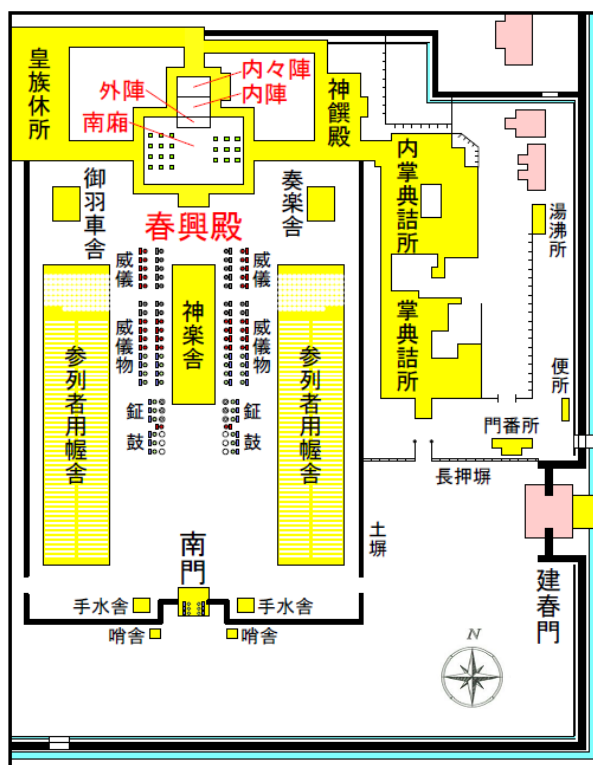
造営時の春興殿とその南庭（『大正大礼記録 140 写真帖 2』〈宮内公文書館所蔵〉）

現在も御即位に際して様々な儀式が行われますが、大正天皇の時には、「即位礼当日賢所大前の儀」「即位礼当日紫宸殿の儀」「大嘗宮の儀」「大饗」が最も重要なものとされています（『大正大礼記録 88』）。

そのうち、「賢所大前の儀」は春興殿で行われ、「紫宸殿の儀」に先立ち、即位を皇祖に報告する神事が行われました。現在、春興殿の前方には砂利敷きの庭が広がるばかりですが、かつて大正天皇と昭和天皇の即位礼では、この儀式のために造られた建造物が建ち並び、堀（南方に門を構える）で囲まれた南庭には、神楽舎や奏楽舎、および 1,900 人以上（昭和天皇の際は 2,200 人余）にのぼる列席者用の幄舎などが設置されました。

春興殿内部は、内々陣に神鏡、内陣に天皇御拝の座（御畳〈短帖〉）、南廂西側に男性皇族、東側に女性皇族等の座（薄畳）が置かれました。大正天皇の時の式次第によると、天皇が拝礼および御告文の奏上を行われた後、皇后（ご懐妊につき列席されなかったためご代拝）と皇太子が順に拝礼を行われ、続いて殿上および庭上の参列者による拝礼が行われました。

また、春興殿では「即位礼後一日賢所御神楽の儀」が行われ、天皇以下による拝礼の後、神楽舎において神楽が奉納されました。

大正天皇 賢所大前の儀 鋪設図
（『大正大礼記録 63・64・103』〈同上〉をもとに作成）

賢所御神楽の儀（『今上天皇御即位大嘗祭絵巻（大正度）』〈宮内庁書陵部所蔵〉）

賢所大前の儀 式場参入の様子
※手前が春興殿南門 奥が建春門
（『昭和大礼記録 45 写真帖 第 7 冊』〈同上〉）

春興殿の銅板葺屋根の葺き替え

一部旧葺材を残して葺き替えています。
ぜひ現地で新旧を御覧ください。



春興殿 (施工前)



春興殿 (施工後)

春興殿は、大正 4 年に内侍所^{ないしどころ} (東京遷都以前の神鏡の安置場所) の跡地に造営されました。神殿としての風格を表すため、花崗岩の石壇の上に円柱を建てて床を高くし、正面には唐戸が用いられています。そして、京都御所内の殿舎が軒並み檜皮葺^{ひわだぶき}であるのに対して、春興殿の屋根は唯一銅板葺^{どうばんぶき}であり、これは大正造営当時の「永久保存の趣旨」に由来するものとされています。

今回の修復工事のために、春興殿の古い銅板葺の屋根を調査したところ、現在は目にすることが難しいような大変珍しい方法で葺かれていることがわかりました。銅板を段状に葺いていく鑢葺^{しろぶき}という方法で、銅板同士を引っかけていく一文字葺^{いちもんじぶき}という一般的なものと異なる手法で葺かれていました。銅板の間に挟み込まれた鉄板には、光明丹という塗料が塗られて錆止めの処置がされていましたが、経年によりそれが流れ落ちて、鉄板の腐食が進み (異なる金属同士の電食^{でんしょく}が発生)、屋根表面の汚れの原因となっていました。

しかし、一般的な一文字葺の銅板葺の耐用年数は約 50 年とされており、その倍の期間、表面の銅板には目立った損傷がなく、これだけの状態を保てたのは、その独特な葺き方のおかげであると考えられます。

屋根の葺き替え工程



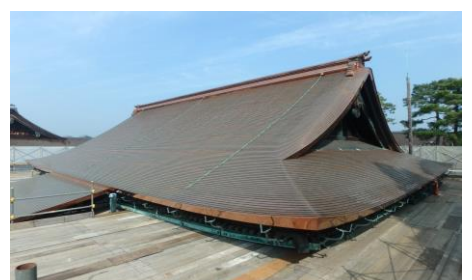
① 葺き替え前



② 銅板葺の解体



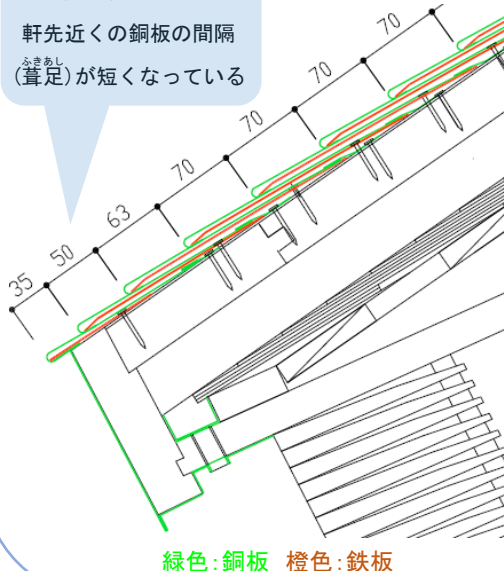
③ 屋根葺材撤去後、野地板の状態



④ 銅板葺の完成

銅板 (鑢葺) の葺き方

こげらぶき
柿葺の葺き方と同様に、
軒先近くの銅板の間隔
(葺足^{ふきあし}) が短くなっている



上方から



断面

土居葺と捨樋



捨樋の水抜き穴



また、屋根葺き材を取り払ったあと、野地板(屋根の葺き替え工程③の写真参照)の下からも、珍しい雨漏り対策のための技術がみられました。野地板を取り外すと、通常は瓦葺きの下地として葺かれる土居葺があらわれ(銅板葺に用いられることは珍しい)、それが雨漏りを防止する役割を果たします。

しかし、春興殿の防水対策はこれでは終わりません。屋根の外側の軒先に取り付けられる雨樋のほか、野地板下層の土居葺の傾斜が終わる軒先にも一つ、外からは全く見えない予備の雨樋(捨樋)が備えられていたのです。捨樋には、間隔を空けて小さな穴が開いており、そこから直接下に雨が流れ落ち、水がたまらないようになっています。

屋根を下部で保護する土居葺と捨樋、人目に触れることのない部分でありながら、丁寧に仕上げられたそれらの部材をながめると、当時の人々の春興殿造営に対する熱意が伝わってくるようです。

強度に優れた春興殿の部戸と壁

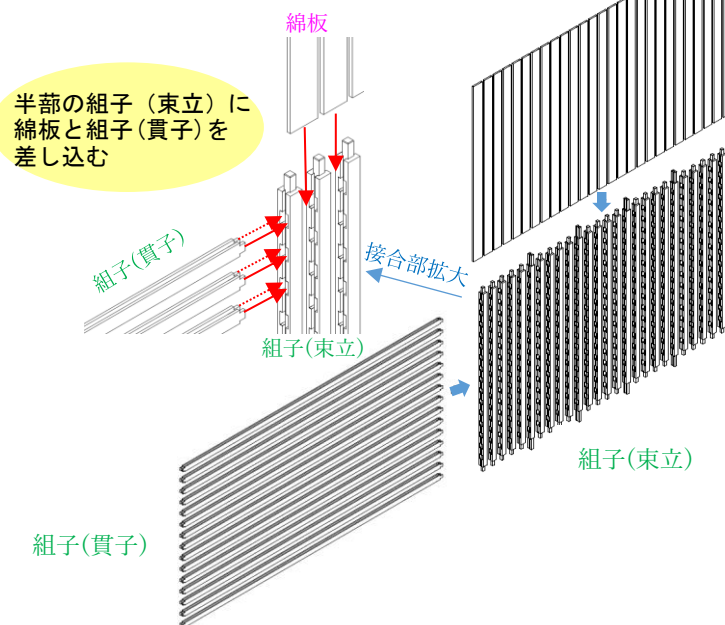
今回の工事では、既存の半部^{はじとみ}を解体したうえで塗り替えが行われました。一見して一般的な部戸^{しとみど}と同じ構法にみえますが、解体してみると、こちらにもまた非常に特殊な構造であることが分かりました。

通常、部戸^{こうし}は一枚の板に、意匠として黒漆塗の格子が外側と内側から張り付けられますが、春興殿の場合は組子自体が構造体となっており、組子(束立)一本一本の間に細い板(綿板^{わたいた})がはめ込まれていて、内外両側から横方向に組子(貫子^{ぬきこ})を通すことで、とても丈夫な構造になっています。

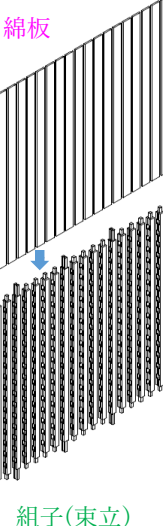
また、春興殿の壁は、内外の仕上げが異なる特別な仕様となっており、外側は漆喰塗として周囲の殿舎との調和を図りつつ、内側は伊勢神宮などと同様に檜板の鏡張り^{かがみば}として、神殿の厳かな雰囲気が漂っています。

今回の工事では壁面の耐震補強も行われ、耐震診断のために壁面内部を確認したところ、檜板を格子状に組んだ下地があらわれました。漆喰壁の下地の板材は、柱と柱の間に水平(一定)方向に並べて取り付けられているのが一般的ですが、春興殿では互い違いに組まれている、地震の揺れにも強い構造となっています。大正時代初期において、すでに現代の耐震の考え方に通じる技法が実現されていたことに驚かされます。

春興殿は神事に関する造営のため、宮内省内匠寮^{くなくいしょうたくみりょう}の直営事業とされ、内匠頭^{たくみのかみ}で工学博士の片山東熊^{かたやまとうくま}(1854-1917)を中心に設計されています。片山は、宮廷建築家として、東宮御所(現:迎賓館赤坂離宮)や帝室奈良・京都両博物館、その他多くの離宮や皇族邸宅などを手掛け、西洋宮殿の様々な様式を日本に移植した人物です。片山の晩年の集大成ともいえる春興殿は、建築構造や部材の細部に至るまで、むしろ見えないところにこそ、現代の職人さんが驚くほどの技術が惜しみなく注ぎ込まれており、卓越した見識と経験に基づく構法は、日本の宮廷建築文化の精華を伝えるものとして、大変貴重なものといえます。



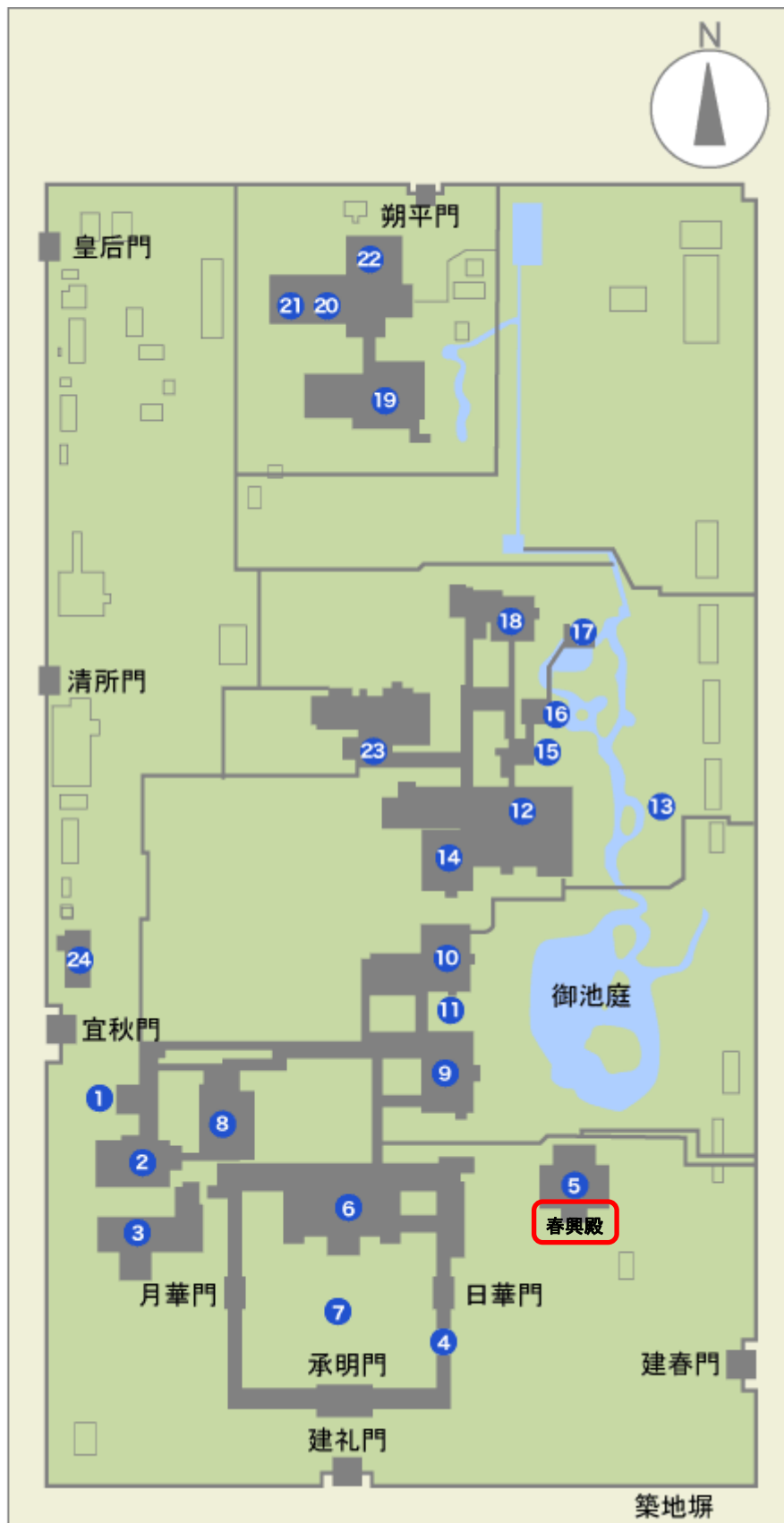
壁面内部



春興殿棟札

京都御所案内図

- ① 御車寄
- ② 諸大夫の間
- ③ 新御車寄
- ④ 回廊
- ⑤ 春興殿
- ⑥ 紫宸殿
- ⑦ 南庭
- ⑧ 清涼殿
- ⑨ 小御所
- ⑩ 御学問所
- ⑪ 蹴鞠の庭
- ⑫ 御常御殿
- ⑬ 御内庭
- ⑭ 御三間
- ⑮ 迎春
- ⑯ 御涼所
- ⑰ 聴雪
- ⑱ 御花御殿
- ⑲ 皇后宮常御殿
- ⑳ 若宮御殿
- ㉑ 姫宮御殿
- ㉒ 飛香舎
- ㉓ 参内殿
- ㉔ 参観者休所



観マークは、参観でご覧になれます。申込み方法は、<http://sankan.kunaicho.go.jp/> をご覧ください。

通マークは、申込不要の京都御所通年公開でご覧になれます。

詳細は、<http://www.kunaicho.go.jp/info/kyototsunen-sks-sankan.html> をご覧ください。

これまでの「《京都》御所と離宮の栞」については、宮内庁ホームページの[こちら](#)からご覧ください。

＜問い合わせ先＞
〒602-8611 京都市上京区京都御苑3 宮内庁京都事務所
代表電話：075-211-1211 参観係直通電話：075-211-1215